



蓬菜軒と熱田の裁断橋址

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

熱 田の神宮駅には、予定通り十一時過ぎに着いた。蓬菜軒にはちょうど開店と同時に飛び込めるだろう。ひつまぶしで有名な熱田の蓬菜軒に初めて入ったのは、今から二〇年以上前の大学生の頃だった。父母が転勤でこの辺りに住んでいたの、遊びに来た私を母が連れて行ってくれたのだ。

私が食べたのは、ひつまぶしではなく、うな重だったが、その美味さもさることながら、飯の中からもう一段かば焼きが出てきた時には、何が起きたのかわからず、思わず周りを見回してしまった。食事であれほどの衝撃を受けたことはない。

さて、蓬菜軒には開店前だというのに、人が群がっていた。二時間待ちの札がかかっている。こんな有名な店になっていったとは思わなかった。たとえ生きた恐竜を見物できるとしても、二時間も並ぶ気はない。残念だが、またの機会にすることにした。しかし案ずるなかれ。熱田まで来たのは、ウナギのみが目的ではない。蓬菜軒から近い、旧東海道筋の伝馬町に裁断橋の址があるのだ。

旧東海道を示すため、砂地のような色の舗装を施された伝馬町の通りをゆくと、裁断橋址があった。マンションに併設された姥堂という寺院の入り口が、四つの擬宝珠をつけた小橋のようになっている。

裁断橋は、かつての東海道宮宿の東の入り口で、この姥堂の東側を流れる精進川に架かっていた。文献では永正六（一五〇九）年の『熱田講式』に見られるので、少なくとも五〇〇年以上前から存在していたことになる。裁断橋という名前は、熱田神宮の社人が罪を犯したときに、ここで裁いたからだとか、諸説があるがはっきりしない。橋のたもとにあった姥堂が「おんばこさん」と呼ばれていたため、おんばこ橋ともいった。

この橋は擬宝珠に刻まれた、亡き息子を思う母の思いをつづった銘文によって大変有名になった。堀尾金助という十八歳の若武者が、天正十八（一五九〇）年の豊臣秀吉による小田原征伐に従軍して帰らぬ人となり、その母が息子の三十三回忌の供養のために、橋の架替をおこなったと刻まれており、意識すると次のようになる。

「天正十八年二月十八日に小田原征伐へ堀尾金助という十八歳になるわが子をたたせてより、もう二度と会えない悲しさのあまりに、供養のため今の橋を架けます。ありし日の姿を思い起こせば涙がこぼれて仕方ないが、どうか成仏して欲しい。わが子の法名の逸岩世俊と後の世の、また後の世まで、この銘文を見た人はどうか念仏をと覚えてください。」

わが子の三十三回忌の供養です。」

もし、この時代に二段重ねのような重があったら、この母親も息子に食べさせていたのだろうと思う。そして飯の中から出てきたうなぎに仰天する息子へ、みっともないから騒ぐんじゃないとほほ笑んでやりたかったのだろうと思う。ちなみに、この場所にある擬宝珠はレプリカで、本物は名古屋博物館に保存されている。



熱田の裁断橋址

[交通] 地下鉄名城線伝馬町駅より徒歩約5分